

ライブラリー情報

No.27 2001.12
Library Information No.27
発行 愛知江南短期大学
図書委員会

目次

絵本との出会い	／ 阿部紀子	わたしがちいさかったころ (アンケート)
Reading to children	／ Timothy Scott Thurston	図書館からのお知らせ
絵本とわたし	／ 大野千愛	本学図書館でみつけた今回紹介の絵本
絵本とわたし	／ 戸松沙季	編集後記
絵本 …	／ 飯田真紀	
おふろ だいすき!	／ 溝口さとみ	

絵本との出会い

幼児教育学科 助教授 阿部 紀子

子どもの頃、『講談社の絵本』を20冊以上持っているのが得意でした。お菓子を我慢して小遣いをため、本屋をはしごし、選びに選んで私が買ったものにもかかわらず、現在1冊も残っていないのが残念、無念です。母がいつのまにか人にあげてしまったのです。私が子どもの頃使ったハンカチまで、きちっと残している家にもかかわらず。ここに子どもの本に対する大人の勘違いが現れているように思います。親が子どもの所有物に対する意識が希薄であること、絵本は子どもの時代のもので、「大きくなればいらない」と思っていることなどです。母に絵本を読んでもらった経験はありませんので、母自身絵本をじっくり読んだことがないのでしょう。たいていの大人は絵本を子ども向けのお菓子のように思い、作品としては見ていません。私自身軽くとらえていたからこそ、絵本が消えていくことを気にしなかったのでしょう。同時に、『講談社の絵本』には残される価値が低かったともいえます。作品としての価値が低ければ、大人を感動させることはできません。『講談社の絵本』は、絵はスゴイのですが、絵本としての評価は高くありません。例えば『小公女』や『雪の女王』を厭わず眺めた私でしたが、悪影響もありました。一つは、原作の本質を汲み取れない矮小化したものだったことです。それを知らない私は、読んだような気になり、原作を読む気になりませんでした。致命的な弱点は、高島華宵など有名画家の絵があまりにも印象が強く、読者に自由な想像をさせにくいものだったことです。動きのない絵が画面の中で完結し、めくる楽しみという連続性も薄い絵本でした。絵の呪縛は強く、今でも他の画家が描いた絵を見ると、「セーラじゃない」「雪の女王じゃない」と思ってしまうほどです。

大学を卒業し高校の教師になった年、隣の先生に「至光社の絵本をいっしょに買おうよ。割引になるよ」と誘われたことが、「芸術作品としての絵本」との出会いでした。1冊丸ごと、表紙、見返しの色、ページ割付、画面構成、文と絵のバランスなど、作者と編集者が最もよい表現を求めて力を尽くした作品でした。このときの『あめのひのおるすばん』と『なつのあさ』はすばらしい作品ですが、現在の絵本と比較すると不満もあります。しかし、私を楽しませ、私を慰めるために絵本のコレクションが始まったことは幸いでした。絵本を「子どものもの」と、無意識に卑下する気持ちを持たなかったからです。自分の目でよく見て、気に入ったものだけを買うことにつながりました。『スーホの白い馬』との出会いは、また一歩絵本

への認識を深めてくれました。画家がストーリーを深く読み取った画面構成に優れた絵本で、文に書かれていない部分を、読者は絵に誘われて理解し、想像を広げます。画家の個性があふれているのに、独りよがりには走っていません。私はじっくり絵本を読むようになりました。

結果としてそれらの絵本たちが、私ばかりかクラスの子どもたちを楽しませ、さらに私の子どもたちを楽しませ、育ててくれました。そればかりでなく、私と子どもたちを結びつけてくれたのです。まさに絵本は子どもに「読んでやるもの」ではなく、「共に楽しむもの」でした。作者が自己表現として真剣に製作した絵本は、本当に力強く、見るものを豊かにしてくれます。そんな絵本を研究室にたくさん揃えました。疲れたときは、どうぞ絵本と遊びにきてください。

Reading to children

教養学科 招聘助教授 Timothy Scott Thurston

Like many people, we've established a bedtime ritual for our two sons that helps them go to sleep. This ritual starts with brushing teeth and ends with reading two books. They get to choose the books from their own collections.

Popular choices for our 4-year old, Owen, include stories of dinosaurs, simple mysteries, and a children's nature magazine from North America called "My Backyard". This magazine teaches children about wildlife from around the world and also about plants and animals close to home.

One popular choice for our 1 1/2 year old, Jesse, is a book naming the parts of the body. We read it to him in English and Japanese so he is becoming somewhat bi-lingual. He also likes any story that includes pictures of balls since he is absolutely fascinated by them right now.

We have an excellent children's picture encyclopaedia with common, everyday objects labelled in Japanese and English. This has proven helpful for Owen and ourselves in expanding our Japanese vocabulary. We've also discovered an English printing of traditional Japanese stories called "Once Upon a time in Japan". This collection includes stories such as *Issun Boshi* and *Momotaro*. These have proven to be very interesting to Owen for the story, and to ourselves for the cultural aspects that these old tales reflect.

Some books that I like to read to my kids are the same ones that my mother read to me when I was a child. Holding those same worn pages in my hands brings the memories of childhood very close to me. If I can pass on some of the love that I experienced through these books to my children, then the positive cycle continues.

I think that reading stories to children expands their minds and creative abilities and has a huge influence on their thoughts and ideas. It also helps create a warm bond between the reader and the child.

One should never underestimate the value of reading to children.

絵本とわたし

生活科学科 栄養士養成コース 1年
大野 千愛

小さい頃、たくさんの絵本と出会いました。私が一番最初に手にした本は、文字のないウサギの絵本だったそうです。記憶のある範囲で大変思い出深いお話が二つあります。一つは母にせがんで何度も読んでもらったお話、もう一つは小学一年生の時に、国語の教科書にのっていたお話です。

『せかいいちゆうめいなフレッド』というお話を御存知でしょうか。飼い主の家族やその友達、ネコの仲間にも愛された人気者のネコのお話です。この本は図書館で見つけた本なのですが、わたしだけでなく、弟も妹も大好きで、母はおそらく何十回も読まれたことでしょう。「また読むの。ほんとに好きだねえ。」という母の言葉を思い出します。そして何より心に残っているのは、お話の途中に出てくるネコたちが歌う場面で、決まって私達三人きょうだいが、そろって歌っていたことです。今でもその歌を覚えているのですが、楽譜もないのになぜ歌えたのか、今思うと不思議でしかたありません。しかし、それだけ弟姉の仲が良かったのだなあと少しうれしくなりました。

“うんとこしょ どっこいしょ”という言葉はどこかで耳にしたことはありませんか。もう一つのお話は「おおきなかぶ」です。小学一年生の三学期だったと思いますが、毎日学校から帰ると声を出しながら一生懸命読みの練習をしていました。最初は上手く読むことができず、ぐずっていたこともありましたが、少しずつ読めるようになってうれしくて、母が食事の準備をしている横で読んだり、妹に読んであげたりしていました。私が今までで一番がんばって読む練習をしたお話かもしれませぬ。

絵本を通じて、思いやりの大切さや両親への感謝の気持ち、協力することによって生まれるよろこびなど、さまざまなことを学んだ気がします。小さい頃に読んだ本をもう一度手にして、あの頃の私は何を感じとったのだろう、今の私は何を感じとることが出来るだろう、そう思いながら読み返すことで、また何か新しい発見があるかもしれません。わかりやすい言葉だからこそ心に響く絵本は、現代の大人が読むべきなのかもしれません。幼児虐待や殺人が次々と起こる今の時代は、絵本に書かれたメッセージを読み落とししてしまった人たちのかたまりでできているのではないのでしょうか。

私はこれからも時々絵本を読み返し、作者が訴えかける大事なメッセージを読み落とすことのない心を忘れないでいたいと思います。

「絵本とわたし」

教養学科ビジネススタディコース 2年
戸松 沙季

「絵本」と聞いて、まず思い浮かぶことは、私がまだ小学校に入学する前の頃の思い出だ。夜寝る前、妹と一緒にふとんの中で、毎日のように絵本を読んでもくれる父と母の声に、夢中になって聞いている情景である。いつ頃からか、いつ頃までだったかは全く覚えがないが、今でもその時のことははっきりと思い出すことができる。

このような体験は、きっとどこのお家庭でも見られることだろう。しかし、私の場合、少し違ったかもしれない。絵本を読む時、特に、普段から近所でも「おもしろい」と人気があった父が、登場人物によって声を変えて読んでくれたからである。父がそうやって読んでくれると、「もう一回読んで。」「さっきと声が違

うよ！」などと言ったり、絵本が手元にない時でも、「あの絵本の〇〇の声で話して。」と何度もせがんだりした覚えがある。

私の家は、今年の始めに引っ越しをしたのだが、荷造りをする時に、こういった絵本が出てきた。もちろんこの話が出て、父も母も私が幼い頃の事を覚えていた事を喜んでくれた。そして私も、何だかあたたかい気持ちになれた。その本は、今ではもう必要ないにも関わらず、捨てる事ができなかった。その為、今でも本棚の奥深くに眠っていて、またふとしたときに、話題になるだろう。

そして、一つ考えてしまう事がある。今の時代でも、子供たちは父親や母親に、絵本を読んでもらえているのだろうか。我が子を虐待するなどといった信じられないニュースが飛び交っていたり、遅くまで仕事をして帰るのが当たり前であったり、両親の共働きが増えた現在では、私の様に絵本を読んでもらえるという習慣は、難しいのかもしれない。私ははっきりと文系だと言えるし、ノートをとるとカラフルにまとめてしまう癖がある。それがもし、幼い頃両親にたくさん絵本を読んでもらったおかげ、色彩豊かできれいな絵本の絵を、毎夜気付かないうちにもじっくりと見ていたおかげだとしたら、そうでなくても、本を読むということは良いことに違いないし、絵本は、良い影響を与えてくれるに違いないはずだ。それに何より、私があの時感じた気持ちを、今の子供たちは感じられていないのかもしれないと考えると、とても切なくなってしまふ。

私は、将来自分が親という立場になった時、きっと父や母に読んでもらった様に、自分の子供に絵本を読むだろう。そして私が読んでもらっているときに興味津々に聞いて感じた、楽しさや面白さ、あるいは悲しさを、たくさん感じて欲しい。正月には、いとこの小さな子供たちが遊びに来る。今度は私が読む立場になるために、近いうち、あの絵本を取り出して、今から練習しておこうかなと思う。

絵本…

社会福祉学科 1年
飯田 真紀

今回、「絵本とわたし」というテーマについて、私は昔を振り返って思いだそうとしました。しかし、私には小さい頃、母親に絵本を読んでもらった記憶が全くといっていいほどないのです。あるとしたら、絵本が大好きな私が一人で絵本を読んでいる姿だけなのです。ふとおもいたって、母親に私の小さい頃のことを聞いてみました。母親自身も私に絵本を読んであげたという記憶が全くないそうです。私には5つ年上の兄がいますが、母はその兄には絵本をたくさん読んであげていたそうです。どうやら私はあまり泣くこともなく、手のかからないいい子だったそうです。母は、だから私には絵本を読む必要もなかったのかもしれないと言っていました。その話を聞いたとき、何だかちょっぴり寂しい気がしました。だから、私は母親になったとき、寂しい思いをさせたくはないので、こどもがもういいと言うくらいたくさん絵本を読んであげたいです。こどもは絵本からたくさん夢を学ぶのだと思います。実際、おとぎ話の好きだった私は将来、きれいなお姫様になってかっこいい王子様と幸せに暮らすのだと夢見ていたものです。少し大人になった私は、そんな絶対にありえないような夢を笑い飛ばすことが出来ます。でも、今この世の中はこれから大人になっていこうとしている少年少女を脅かすような醜い犯罪や世界を震わせている米中核同時テロ、そして、戦争が起こっています。私はそんなひどく悲しいニュースを聞いたたびにどれだけ何の罪もない子供たちを悲しませれば気が済むのかと思います。今、私自身も信じられない世の中にいるような気がしてなりません。どこかの新聞で今の若い日本人は幸せ慣れをしていて、戦争の怖さを知らない、知るべきだと言っていました。私は幸せ慣れをしていていいのだと思います。だから、こどもたちは絵本をたくさん読んで夢をいっぱい思い描いて欲しいです。こどもたちで平和で幸せな世界を築いて欲しいです。そのためには絵本も必要じゃないのでしょうか？私はそう思います。私が一番好きな絵本は

やっぱりおとぎ話の世界です。シンデレラ、白雪姫、眠りの森の姫など題名を出したら数が知れません。私は小さい頃から、基本的に何であってもハッピーエンドが好きなので、ハッピーエンドの原型といったらおとぎ話だと思います。おとぎ話はこどもが喜ぶような分かりやすい内容で現実感があふれていないところが私は大好きです。今も本屋さんに行ってふと見かけると読んだりします。最近は絵本ブームなのか、本屋さんに行くとかくさんの絵本がおいてあります。少し前にブームになった菊田まりこさんが描いた「いつでも会える」という絵本もとても素敵ですが、私はぜひ、菊田さんの「君のためにできるコト」という絵本をみなさんに読んでもらいたいと思います。年齢に関係なく、いろんな絵本をみなさん読んでみて下さい。

おふろ だいすき！

幼児教育学科3部 1年
溝口 さとみ

絵本を買いにいきました。「子どもの好きな本にしよう。」と思っていたのですが、キティーちゃんやアンパンマンの本を選んだので、私がいくつか選び、その中から1冊を決めることで納得してくれました。結局、娘は『おふろだいすき』に決めました。家で早速読んだのですが、半分も読まないうちに手で遊びはじめてしまいました。そこで「読む？」と聞くと、「もう、いい！」と言われてしまいました。

娘を選んだのだから、喜んで聞いてくれるだろう、と思っていたのですが、残念なことにそうではありませんでした。選んだ時に理由を聞いたところ、「動物がいっぱいいるから！」と言っていたし、内容も、かめ、ペンギン、くじら、かばなどがお風呂に遊びにくるという、動物に興味を持っているお風呂好きの娘には、ピッタリだと思ったのですが。買った日に読んで以来、読まれていません。

本を読んでもらうことは好きで、お昼寝と夜眠るときには、忙しくても本を読むことに決めています。読む本は娘が選んで持ってくるのですが、『おふろだいすき』は選んでもらえません。今のところしまわれたままですが、絵もとてもきれいなので、そのうちパラパラとめくってくれるだろうと思っています。

年齢にふさわしい本を選ぶ、という点で、保育園にはふさわしい本がたくさんあります。現在、娘の通う園には、2階の端ですが図書室があり、毎週木曜日に1冊借りてきて、月曜日に返す貸し出しもしています。借りてくる本にはたいいてい集中して聞いています。今週は『りんごがたべたいねずみくん』でした。『おふろだいすき』と比べてみると、1ページあたりの文字数が違います。長い話を聞くのは娘にはまだ早かったようです。

これを書いた後、『おふろだいすき』を娘が私に読んでくれました。1度途中まで読んだだけなので、絵を見て話を作っていました。そして、自分の家のおふろには絵本に出てくる「あひるのぷっかがどうしていないの？」「ぷっかがいたらいいね」と言うようになりました。そしておもちゃ売り場であひるを見つけ、「あー。ぷっか、こんなところに売ってたんだー。」とあひるに話しかけていました。今、アヒルは、我が家のおふろにいます。名前はもちろん「ぷっか」です。そして、絵本にあるように「ぷっかは、からだあらわれない」と言ったり、「ゆかげんはちょうどいい！」なんて話していて、おふろが楽しみようです。

わたしがちいさかったころ

本学の先生方に質問させて頂きました。「ご自分が子どものころ（小学校に行く以前、字が読めるようになる前）に、一番のお気に入りでお母さんに何度もせがんだようなお話は何ですか？」 頂いたお答えは、お名前のあいうえお順に並んでいます。

相磯正芳	忙しかったのでしょうか、話を聞いた覚えはありませんが、母の里の神社や寺のお祭りによく連れて行ってもらいました。往路のバスは何でもなかったのですが、不思議と復路は必ずとっていいほど酔い、運転士の横(窓側)が私の指定席のようでした。今でもハッキリと覚えています。
阿部紀子	講談社の絵本の「小公女」「雪の女王」(高島華宵 絵)
五十嵐福代	私のお気に入りには松坂屋で売っていたママー人形とピンクと紫の洋服でした。
石川美保子	桃太郎
石田清子	たくさんの本を母によんでもらい何度もせがんだようですが、私は全く覚えがないので、申し訳ございません。
伊藤和子	「こぶとりじいさん」こぶが取れるときが一番好きでした。
大崎千秋	「三匹のこぶた」大崎本人はほとんど憶えがなく母親に聞きました。久し振りに、母親と子供の頃の話話が絶えない一日になりました。ありがとうございました。
大西一也	「DUMBO」
加田静子	70才<生年月日 S.6.5.21>かぐや姫、はちかつぎ姫、その他もたろう、一寸法師(今から約65年以上前になりますので、ご参考になりますでしょうか。)
木下太志	残念ながら覚えておりません。しかし、強いてあげれば祖母の昔話くらいか。よく山婆が出てきた。
久保智恵子	おやゆび姫
清水たま子	残念ながら覚えておりませんでした。
生源寺靖浩	日本の昔話「カチカチ山」「いなばの白うさぎ」「浦島太郎」など(昭和15年前後)
鈴木康恵	はらぺこあおむし
高橋敏郎	あまり記憶にありません。あるといえば「中江藤樹」とか「高野長英」の話ぐらいです。小学校3年ぐらいには「ドリトル先生」を夢中で読んでいました。
高橋由紀	母親に聞いてみたら、特に「これ」というお気に入りはなく、どんなものでも好きだったようです。(新聞の記事でも喜んでいたらしい)ちなみに3才くらいからは自分で本を読んでいたようです。天才!!(小さい頃のみ)
富田耕史	ひとまねこざる、のろまなローラー、いたずらきかんしゃちゅうちゅう、しょうぼうじどうしゃじぶた、11ぴきのねことあほうどり、だるまちゃんどてんぐちゃん?、おおきなかぶ
中井三留	アヒルのかあさん
野原由利子	「舌切り雀」「花咲か爺さん」「おむすびころりん」この3冊から、やさしさと正直が大切でいじわるやよくばりはいけないうことだということを知りかえし感じとっていたように思います。
古田あき子	一寸法師
水野里恵	ダンボ・バンビ・101匹わんちゃんなどのディズニーの絵本
山田輝子	「赤ずきんちゃん」母がおばあさんに変装したおおかみの声色をいろいろ変えて読んでくれたのを思い出します。
吉尾信子	「このお話!!」というものではないのですが、祖父が買ってくれた手の平に乗るほどの陶製のうさぎの人形が大好きで、いつも手に持って遊んでいたそうです。2兎の白うさぎがニコニコしながら、今にも跳びはねようとしている姿で、幼い私は「うさぎさん、何してるの?」と問いかけ、母は「お月様を見て、ダンスしてるのよ。」と答えてくれていたのを覚えています。「うさぎのダンス」という童謡も教えてくれました。今でも♪ソラソラ うさぎのダンス～♪というイントロ部分はすぐ頭に浮かんできます。思い出話を書いてしまい、申し訳ありません。
輪倉一広	母から話(物語)を聞いた記憶がありません。多分、そのような機会がなかったし、私の関心も薄かったのだらうと思います。

本学図書館でみつけた今回紹介された絵本

(紙面の都合で、タイトルのみのご紹介の本があります。)

講談社の絵本 (復刻版)

「浦島太郎」、「舌きり雀」、「猿蟹合戦」、「花咲爺」、
「かちかち山」、「桃太郎」、「かぐや姫」、「一寸法師」

高島華宵名画集

あめのひのおるすばん

なつのあさ

スーホの白い馬

せかいいちゆうめいなフレッド

おおきなかぶ

君のためにできるコト

いつでも会える

おふろだいすき

こぶとり さるのひとりごと

やまんばとうしかた

やまんばのにしき

いなばのしろさぎ

いっすんぼうし

はらぺこあおむし

高野長英

ドリトル先生 (シリーズ全13巻)

ひとまねこざる

いたずらきかんしゃちゆうちゆう

しょうぼうじどうしゃ じふた

11びきのねことあほうどり

だるまちゃんとてんぐちゃん

ディズニー名作絵本 講談社

高島華宵

岩崎ちひろ 絵・文

谷内こうた 絵・文

大塚勇三 再話 赤羽末吉 絵

ポージー・シモンズ作

内田莉沙子 再話 佐藤忠良 絵

菊田まりこ 作

菊田まりこ 作

松岡享子 文 林明子 絵

松谷みよ子 著 野村俊夫 絵

森比左志 文 村上勉 絵

松谷みよ子 文 瀬川康男 絵

舟崎勝彦 文 赤羽末吉 絵

村上勉 絵

エリック・カール 作

筑波常治 作 田代三善 絵

ロフティング 作

H. A. レイ

B.R. パートン作

渡辺茂男 作 山本忠敬 絵

馬場のぼる 作

加古里子 文・絵

「ダンボ」、「バンビ」、「101匹わんちゃん」、「ピノキオ」、
「不思議の国のアリス」、「白雪姫」、「シンデレラ」 他

講談社

至光社

至光社

福音館

祐学社

こどものとも

学研

学研

福音館

講談社

フレーベル

ポプラ社

あかね書房

あかね書房

偕成社

国土社

岩波書店

岩波書店

福音館

福音館

こぐま社

福音館

雪の女王

シンデレラ

赤ずきん

おやゆびちゃん

三匹のこぶた

ルイス・N 文

ペロー作

グリム 原作

アンデルセン 作

イギリス昔話

エーデル・ル・カイン 絵

エーデル・ル・カイン 絵

和歌山静子 絵

堀内誠一 絵

山田三郎 絵

ほるぷ

ほるぷ

講談社

福音館

こどものとも

新着 DVD

リトルダンサー

初恋のきた道

白雪姫

フランダーズの犬

ハンニバル

フィラデルフィア

アポロ13

いっこく堂

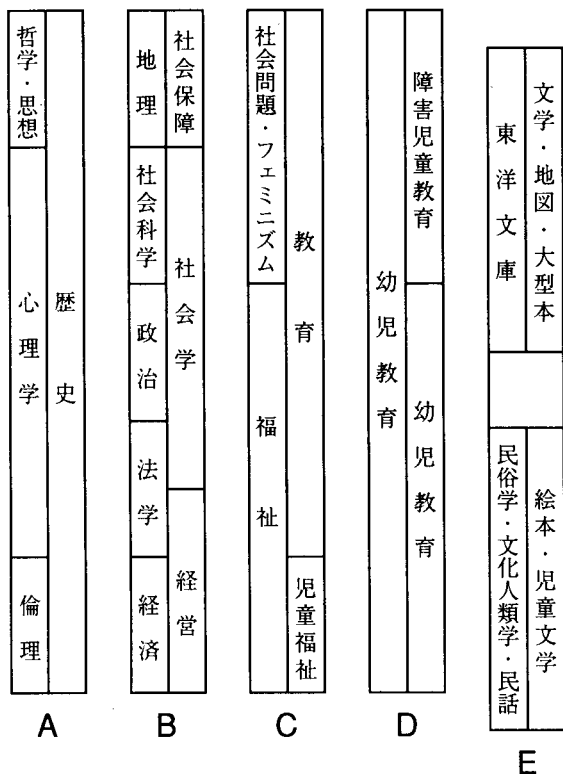
探偵物語

フジコ

図書館配架図

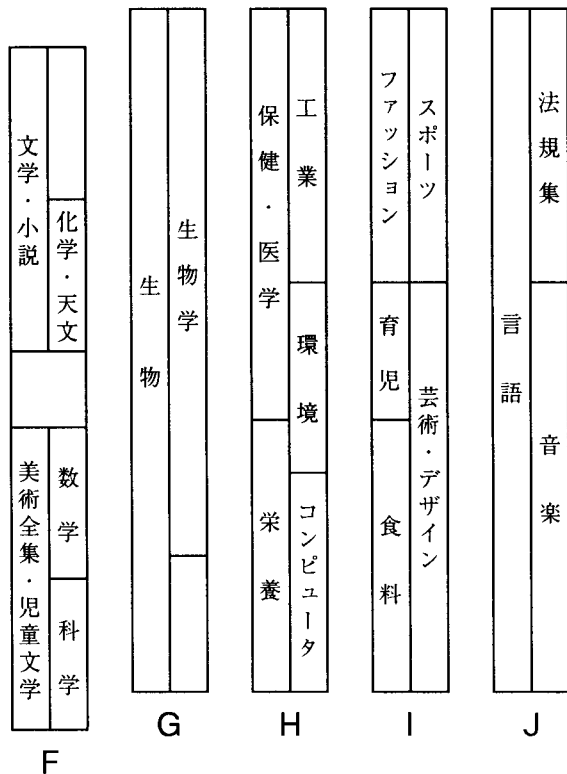
K

新開 縮冊版	白書・年鑑	介護関係
-----------	-------	------



L

料理	建築・インテリア・造園
----	-------------



防音工事に伴って、図書館の本の配置をみなさんが使いやすいように変えました。本がさがしやすくなったと思いますので、ぜひおこしください。

参考図書 (事典・イミダスなど調べ物の本)

M

N



編集後記

今回のテーマは「絵本とわたし」。みなさんに幼かった頃の思い出の糸をたぐりよせていただきました。その頃の懐かしい情景がよみがえってきたことと思います。暗いニュースばかりの昨今、全世界に1日も早くこんなひとときを味わえる幸せが訪れることを祈らずにはいられません。では、みなさんにとって2002年が良い年でありますように。

(T.Y.)